

はり ま たん けん
播 磨 探 検

2017. 12. 11 279号

えん 赤松 弘一



オオバンの脚の指の骨の様子
(多くの鳥類はこの形)
4本の指すべての骨の数が違う!

身体に比べて脚が不釣り合いに大きい

オオバン 大鵜 (クイナ科) 雌雄不明 体長 約 31cm

学名 *Fulica atra* 学名は「すすけた黒」という意味 英名 Coot

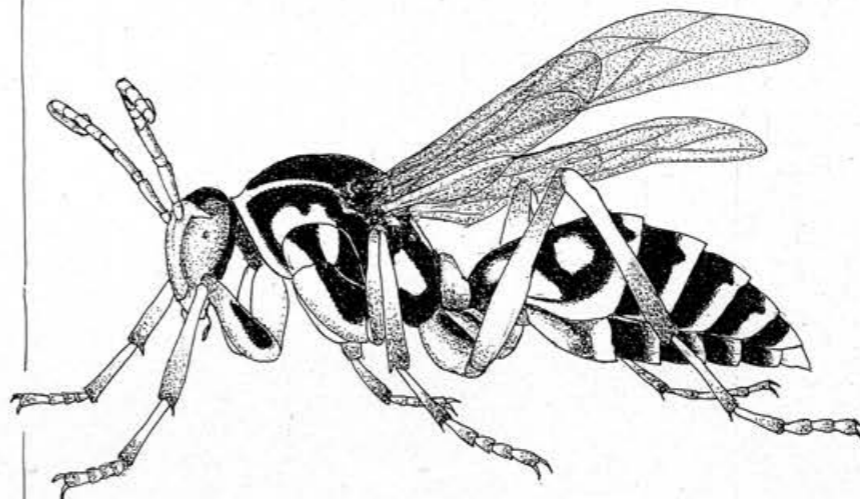
12月4日の朝、快晴のもと校門で気持ちよく朝の挨拶をしていた。登校中の男子が「鳥が死んでる」というので見に行くと、校門前の家のガレージ前に黒っぽい大きな鳥が死んでいた。ハトよりもひとまわり大きく羽毛は全体に灰色で、頭と尾は黒い。身体と不釣り合いに脚は大きく、長い指の一本一本にひれ状の膨らみがついている。これはカイツブリなどの水鳥の特徴であるが、体の大きさや翅の色がカイツブリとは異なる。身体に目立った傷はないが、口からは少量の血液が出ている。死んだ野鳥は鳥インフルエンザなどの感染も疑われるので、触らず写真を撮ってから埋葬することにした。用務員の松葉瀬さんが、はさみではさんで袋に入れてくれたが、その際に口ばしの上から額にかけて白い額板があるのが見えた。これで名前がわかった。「これはオオバンですな、明石のため池では割とよく見かけます」と、元理科教師の校長はドヤ顔で松葉瀬さんに話した。

オオバンは南北アメリカを除くほぼ全世界に生息しており、日本では夏に北海道、本州、九州で繁殖し、冬季になると本州以南で越冬する冬鳥または留鳥とされている。脚指のひれは弁足と呼ばれ、巧みな潜水に役立つ。水中や水辺の植物を餌とし、昆虫や魚を食べることもあるらしい。水辺に積み上げた水草の巣の上に10個前後もの卵を産んで温める。日本では希少種だったが、最近特に琵琶湖で著しく増えているという。中国の環境汚染から避難してきたのではないかという説もあるが、どうだろう。

魚住の親水公園のため池では、同じクイナ科のバンを見かけたことがある。これはオオバンと違い額板が赤いので一目で見分けられる。20年程前のことだがまだいるだろうか？

死因不明のオオバンは写真撮影し、体長などを計測した後で学習園の隅に埋葬した。夏ごろには掘って頭骨標本作製したい。これまでいろんな学校で鳥の埋葬を行ってきたが、ざっとあげてみるとスズメ、メジロ、ヒヨドリ、キジバト、ノゴマ、ルリビタキ、メボソムシクイ、シロハラ、他にもいたような… これらの鳥の死因の中では、学校の窓ガラスへの激突死がかなり多い。透明な窓ガラスは鳥にとって目に見えない危険な壁なのである。

オス蜂たちの哀しき日光浴 ~フタモンアシナガバチ~



フタモンアシナガバチ ♂
(スズメバチ科)
二紋脚長蜂
体長 16mm
学名 *Polistes chinensis*
英名 Paper wasp



オスは顔の前面が黄色い

「ハチが自転車の金属のところに集まってきているんですが、何なのでしょう？」と5年生のお母さんから質問された。我が家でも毎年秋の終わりごろに自転車の泥除けの金属部分や、エアコン室外機の日よけアルミシートの上に群がっているのを見かける。「たぶんそれは寒くなってきたので、暖かい日差しで日なたぼっこしているアシナガバチですね」と推測でお答えした。実際のところどうなのか、いつもいい加減なことを言っているので、この際ちょうどよい機会だと思い改めて詳しく調べてみた。

12月3日、気温は低いが小春日和のこの日、我が家の狭い庭にはいつもと同じくアシナガバチが5~6匹プランターのふちやアルミシートの上で戯れるように飛び交っていた。セグロアシナガバチより二回りほど小さく、体全体は黒くて細い黄色のストライプと、腹の背面に黄色い2つの丸い紋がある。これはフタモンアシナガバチだ。夏の終わり頃には巣は千近い部屋を持つほど大きくなるが、女王蜂は多数のオス蜂とメス蜂(翌年の女王)を産んで死ぬ。アシナガバチやスズメバチなどの狩りバチは、イモムシなどの獲物が姿を消してしまう冬には、新しく生まれた多数の女王蜂とオス蜂を残して働き蜂はみんな死に、巣は朽ちていく。新女王は他のコロニーのオス蜂と交尾したのち、板塀の隙間などで冬を越し、春になると単独で巣作りをし、卵を産んでコロニー(集団)を作り始める。

さて日向ぼっこしていたハチだが、これはよく見るとみんな触角が長く先端がカールしており顔が黄色い。これはオス蜂の特徴である。これらのオス蜂たちは、別のコロニーで生まれたメス蜂がやってくるのを日なたで温まりながら待っているのである。

面白いのは、女王が死んだ巣では働き蜂が産卵を始めるという。もともと働き蜂は女王の娘で、すべてメス蜂である。女王がいる間は何らかの作用で産卵が抑制されているのだが、女王が死ぬとその抑制がなくなり働き蜂は卵を産むらしい。この卵は受精していないのですべてオス蜂になるのだが、多くは他の働き蜂によって排除されてしまうという。

すでに働き蜂が死に絶えた巣に残されたオス蜂たちは「メス蜂は来ないし、男ばかりで暇だなあ、することないし寒いし…今日は天気がいいから日向ぼっこでもするか、はあ~ぬくい」などと呟いているかもしれない。昼間は日向ぼっこして夜は古巣に戻り、なすこと無く過ごすうちにやがて寒さと飢えで死に絶えてしまう。生物の世界ではメスは子を産み命のバトンをしっかりとつなぐためにタクマシク走っている感があるが、オスはどうも存在が希薄で、イソウロウのような哀しみが漂う。と男の私は思う。